■作家略歴

稲嶺成祚(いなみね・せいそ1932年~)

1932年那覇市生まれ。安里国民学校時代に熊本へ学童疎開。 終戦後、沖縄へ戻り那覇高校で島田寛平が指導する美術クラブに 所属し、物資不足の中で米軍の廃品から筆記用具を探し、絵を描 く日々を送る。1951年に琉球大学美術工芸科入学。1957 年「第1回稲嶺成祚個展」(那覇高校)を皮切りに、現在に至る まで数多くの個展を開催。1972年から1998年まで琉球大 学で教鞭をとり、多くの美術教員を養成した教育者でもある。2 018年沖縄県文化功労者表彰、2019年令和元年度地域文化 功労者表彰(芸術分野)を受けた。



②町(1959)作家蔵



③B52 と<mark>カ</mark>ラカラー (1969)





5屋根の上のシーサー (1994) 作家蔵











⑨大きな壺のある静物 (3) (2012) 作家蔵

※ 広報用画像をご希望の方は ms-kinjo@okichura.jp ヘメールをお送り下さい。

関連催事

2020 9/18(金)

アーティストトーク 【時間】10:00~11:00

10/3(±)

学芸員によるギャラリートーク

沖縄県立博物館·美術館

観覧料

観覧料 Fee	— 般 Adults	高校·大学生 H.S.&Univ. and Col.Students	小・中学生 E.S. & J.H.S. Students
一 般	¥1,100 (880円)	¥500 (400円)	¥200 (160円)











沖縄県那覇市おもろまち3丁目1番1号 Tel:098-941-8200(代表) MAPCODE 33 188 675

https://okimu.jp









<mark>沖</mark>縄の美術シリーズ៕

2020年9月18日(金) ▶ 11月3日(火)

沖縄県立博物館・美術館 企画ギャラリー1・2 Okinawa Prefectural Museum and Art Museum Exhibition Gallery1,2

【開館時間】月曜日(月曜日が祝日にあたる場合は開館し、翌平日が休館)

【 主 催 】沖縄県立博物館·美術館

【協力】沖縄県立図書館/琉球大学教育学部附属小学校/浦添市立港川小学校/ 学校法人カトリック学園首里カトリック幼稚園/社会福祉法人玉重福祉会仲井真こども園

】沖縄県教育委員会/那覇市教育委員会/沖縄県文化協会/那覇市文化協会/一般社団法人沖縄美術家連盟/ 沖縄県造形教育連盟/一般財団法人沖縄観光コンペンションビューロー/沖縄タイムス社/琉球新報社/ 沖縄テレビ放送/琉球放送/琉球朝日放送/ラジオ沖縄/エフエム沖縄/NHK沖縄放送局/fm那覇



OkiMu News Release

きごうの、ふうけど。

かつて『概念的な絵』という言葉がよく使われました。絵を酷評するもっとも強力な武器としてです。 『おれは概念的な絵をかいてやろう』と思い立ったのが私の絵の始まりでした。 一 稲嶺成祚

子どもが描く記号的な絵でも、意味が伝わる。そこに具象絵画の根源と可能性を見出した稲嶺成祚(いなみね・ せいそ)は、「何を描くかも大事だが、どのように描くかの方に、より重大なメッセージが入る」と語り、独 自の様式を作り出そうと試みます。本展では、60年を超える画業の中で1600点以上の絵を描いてきた画家 の変遷をたどる、作品約90点を紹介します。

1。写実からの脱却

琉球大学卒業後、沖縄で絵を学ぶことに限界を感じ1年間東京に滞在した稲嶺は、あるとき美術館に展示さ れていた西洋画を観て、その圧倒的な写実表現に衝撃を受けます。「西洋の様式を追っては西洋の画家に敵わ ない」と考え、西洋画とは異なる日本画の平面性に着目するようになります。これがきっかけとなり自らの 様式を模索しはじめます。







第2章記号のプロセス

画家として活動しながら美術教員となった稲嶺は、子どもが描く単純化された形に注目します。例えば幼児 が描く「花」は、実際には存在しない記号的な形ですが、それを見た人は「花」という概念を示す絵である ことを理解します。こうした記号を認識する人間の力に、表現の新たな方向性を見出します。







OkiMu News Release

実験部屋

稲嶺は、50cm以下の作品を数多く制作しています。これらの小さな作品は自らの様式を生み出そうと探求 する稲嶺の実験場です。80年代以降に手掛けるようになった壁画をはじめとする仕事もまた、その画面の 大きさゆえに、それまでとは違った構図を模索するきっかけとなりました。





5 屋根の上のシーサー (1994) 作家蔵

電面から線へ

1970年代以降、自らの様式の出発となった日本画的な平面性に回帰します。さらに、壁画といった、こ れまでと異なった形態の作品に挑戦する中で絵画の装飾性に着目するようになります。本章では、平面的で 記号的な表現を土台としながらも、次第に色を重視した表現から、次第に線による表現へと展開していく過 程を見ることができます。





1990年代になると、線と線の間を色面で埋めるようになり、再び面の世界へ移行します。そして「日常 は様々な場面の集合で成り立っている」という稲嶺の言葉通り、異なる時間や空間を一つの画面に同居させ たような独自の様式を確立していきます。最終章では60年の画業でたどり着いたパラレルな空間構成の作 品を紹介します。





